



Title	永井隆則編著『越境する造形：近代の美術とデザインの十字路』
Author(s)	渡辺, 眞
Citation	デザイン理論. 2004, 44, p. 180-181
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53049
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

永井隆則編著

『越境する造形——近代の美術とデザインの十字路』

晃洋書房 2003年

渡辺 眞／京都市立芸術大学

本書は、編者が語るように、美術とデザインの間に関わられてきた数居あるいは垣根を取り払おうという意図の下に、『越境する造形』と題して、美術からデザイン、デザインから美術に越境してみせた13人の「モダニズムのヒーロー」を取り上げたものである。ルノアール、セザンヌ、ロートレック、ゴーギャン、マチス、ル・コルビュジェ、カンディンスキー、クリムト、モンドリアン、マレーヴィチ、ドナルド・ジャッド、ウォーホル、シンディー・シャーマンという13人について、それぞれ分担して叙述されている。意匠学会の会員としては、永井隆則会員が編者および「セザンヌ」を担当し、伊集院敬行会員は「ル・コルビュジェ」、谷本尚子会員は「マレーヴィチ」、市川靖史会員は「シンディー・シャーマン」、それに長く意匠学会の会員で、惜しくも亡くなられた濱野節朗元会員が「クリムト」を担当されている。全体を紹介する余裕はないので、会員の分担部分についてのみ概要を簡単に紹介しておきたい。

「セザンヌ」については、作品に内在するデザイン性、さらに有機的形態と幾何学形態の両面におけるデザイン造形への影響が論じられている。有機的形態はアール・ヌーヴォーへ、他方幾何学形態面では、「セザンヌは、創造的に誤解されて、重要な源泉となった。」という形で、モダン・デザイン全般に影響が及んだと指摘されている。

「ル・コルビュジェ」では、建築家としての仕事は勿論であるが、ジャヌレの名の下でのピュリスムの絵画、およびオザンファンとの共同での『エスプリ・ヌーヴォー』誌の発

行、さらに同誌における編集にあって日常品に目を向けた写真の採用など、ル・コルビュジェのまさに境を越えた造形活動の様相が論述されている。

「クリムト」では、壁画から始まり、「黄金の様式」を含む肖像画、晩年の風景画など絵画におけるクリムトの軌跡を中心としつつも、初代会長を務めたウィーン分離派の機関誌『フェル・サクム』への挿絵の寄稿、第1回展と第18回展のポスター、ウィーン工房との共同制作活動などが詳細に述べられている。

「マレーヴィチ」では、シュプレマティズムの絵画を生み出すに至った経過と、それが建築的構築体「アルヒテクトン」や平面の建築計画案「プラニート」へと展開し、さらに仲間や学生たちによるシュプレマティズムの応用造形、そして1923年以降のペトログラードの磁器工場における活動が、社会的思想的背景とともに詳述されている。

「シンディー・シャーマン」は、少し異質で、シャーマンのデザイン活動ではなく、ファッションに代表されるように、デザインが生み出した現代環境における社会的身体像とまなざしの在り様を暴き続ける彼女の写真活動の展開と特質が論述されている。

絵画や彫刻などを高尚な芸術とし、デザインや工芸を一段低く見るという価値差別を含んだ関係について、その不当性と解体を主張する論説が様々になされてきた。言説の上ではもはやあえて反対を唱える人も稀になっているにもかかわらず、差別観が完全に消失したかといえば、そうでもない。これには、暗黙に支える社会構造がある。

一つは、人とその活動を賛える評価にあって、美術では作品と作者が1対1の関係であるのに対して、デザインや工芸（一品制作の美術工芸は美術に近い）では、量産における多対1、チーム活動による1対多、あるいは多対多となり、作品の評価がそのまま作者個人の評価につながりにくい。

またコレクションという面においても、量産品には稀少価値がつきにくく、コレクター・アイテムとしての不利がある。所蔵し、収蔵し、展観する場合でも、デザイン関係一般では、不利なものが数多くある。自動車や家具、カメラなどは、コレクターも少なくなく、それらを展観する博物館もあるが、洗濯機や冷蔵庫は、参考例程度の展観はあっても、メインのコレクションの対象にはならない。ポスターのコレクションはあってもパッケージのコレクションはほとんど知られていない。このような有利、不利の関係は、美術館とデザイン・ミュージアムの関係をみれば明らかである。

さらに社会的な相場として成立している作品の価格レベル差も、差別観を支える大きな要因である。差別によって利を得ている側は、当然差別の存続を望む。

私個人は、差別は正当だとは思わない。しかし本質的なところで、役割の違いがあると思っている。普遍的な立場で造形や表現の問題を追求するのと、具体的な個々の生活場面での問題を造形的に解決していくという立場の違いを解消してしまってもよいとは思わない。ただし、現在美術とされている作品がすべて前者の立場にあるといった単純なものではない。絵画や彫刻であっても、個人の気持ちや気分に応えるものがあってもいいし、普遍的な立場での生活変革が目指されるデザインがあってもいい。したがって絵画や彫刻をファイン・アートとしてデザインや工芸より高尚で

あるという差別観は不当だと思う。しかし歴史的に形成されてきた評価の社会的システムは、言説だけでは解消しない。

基本的に社会的関心度にまだまだ差がある。本書での人選でも、やはり画家として業績を残した作家が多く、その越境も必ずしもデザイン領域で歴史に残ると評価できるとはいえない。デザイナーや建築家として活躍し、美術の領域に越境した例は少ない。ル・コルビュジェは例外的な存在で、ウォーホルの場合には、デザイナーとして活動しつつ絵画を制作したのではなく、転向したのである。その上、デザイナーとして一流であったかも知れないが、超一流の存在ではなかった。グラフィック・アーティストとして活躍し、晩年は絵画に専念した例は少なくない。しかしそうした作品が本格的に注目されることは少ない。

ともあれ越境の事実には焦点がおかれた点は、今後の研究を誘発する試みとして興味深い。ただ差別観を解消することにつながるためには、美術家によるデザイン領域への越境だけではなく、逆のデザイナーによる美術への越境に興味深い事例が十分に見いだされることが望まれよう。